

# 実践研究報告

## 「学びの集大成としての修学旅行」

### —つなげ、奇跡の命—

名古屋市立丸の内中学校  
校長 坂野 幸彦  
教諭 坪井 大知

#### I はじめに

- 1 本校の概要
- 2 本校の教育
  - (1) 教育目標
  - (2) 教育目標に迫るための教育活動
- 3 現3年生のこれまでの「命」の学習
  - (1) 防災学習
    - ① 陸前高田交流会
    - ② 神戸市立渚中学校との交流
    - ③ 港防災センター・減災館訪問
    - ④ 名古屋市消防航空隊訪問（西日本豪雨災害義援金募金）
    - ⑤ ひまわりプロジェクト
  - (2) 平和学習
    - ① 愛知・名古屋 戦争に関する資料館訪問
    - ② 被爆ピアノとのセッション
    - ③ 平和学習発表会
    - ④ 被爆体験伝承講話（千羽鶴作成）
  - (3) 命の誕生
    - ① 「自分史」作成
    - ② 家族からの手紙（相田みつを「いのちのバトン」）
    - ③ 命T-シャツ作成
    - ④ 助産師による命の授業・「生」教育
    - ⑤ 保育実習体験

#### II 令和元年度の実践

- 1 修学旅行のねらい
- 2 行程
- 3 事前の取り組み
  - (1) スローガンの作成
  - (2) ルール作り
  - (3) 班の編成
  - (4) 修学旅行における個々の役割
- 4 修学旅行の実際の取り組み
  - (1) 原爆ドーム・平和記念公園
  - (2) 宮島・厳島神社
  - (3) 旅館「魚光」（相田みつを「いのち」）
  - (4) 姫路城
  - (5) 神戸市立渚中学校
  - (6) 南京町・震災メモリアルパーク（神戸港）
  - (7) 六甲ガーデンテラス
  - (8) **THE PARK FRONT HOTEL**
  - (9) ユニバーサルスタジオジャパン
- 5 事後の取り組み
  - (1) 修学旅行の振り返り
  - (2) 修学旅行報告会
  - (3) 広島平和記念式典（夾竹桃物語 —わすれていてごめんね—）

#### III おわりに

# 「学びの集大成としての修学旅行」 —つなげ、奇跡の命—

名古屋市立丸の内中学校

## I はじめに

### 1 本校の概要

本校学区及び周辺は市役所や県庁をはじめとする官庁街であるとともに、名古屋城を中心とした環境保全地区で、「芸所」として古くから伝わる伝統文化の根付く地域である。御園座を代表として、地域に点在する様々な文化施設や文化継承者を「地域の教育力」と位置づけ学習活動を展開している。

丸の内中学校は創立 55 年目に入り、生徒数は 92 名、学級数は 3 学級で小規模な学校である。クラス替えがなく、3 年間同じメンバーで生活しているため、学年の絆はとも強い。素直で人懐っこい生徒が多いのも特徴で、縦割り活動を取り入れると自然と会話がうまれ、上級生が下級生をリードする姿が見られる。こうした取り組みを続けていくことで、同学年の横のつながりだけでなく、他学年との縦のつながりも強くなっている。また、教科担任がすべてのクラスで授業を行うことができるので、全教員で全生徒を見守ることができている。さらに、小規模校だからこそ保護者や地域とのつながりも深く、学校にも協力的である。こうした強いつながりから生まれる学校への思いは、これまで築いてきた丸の内中学校の伝統を礎に、新たな歴史を刻むべく、さらなる活性化を目指した取り組みの推進力となっている。

### 2 本校の教育

#### (1) 教育目標（校訓）

- ・自ら進んで物事を行い、自己の判断に責任をもてる心を育てる。 ⇒ 

自主
----
- ・人の立場を理解し、互いに協力し合う思いやりの心を育てる。 ⇒ 

敬愛
----
- ・真実を誠実に求めていく心を育てる。 ⇒ 

真実
----

#### (2) 教育目標に迫るための教育活動

名古屋市の平成 31 年度指導方針の中心である、仲間と学びを深める授業づくり「なかまなビジョン」を授業づくりの軸として進め、生徒の主体的に学ぶ意欲を高めている。また、異学年での学習集団にしたり、指導教員をシャッフルしたりし、より多くの仲間と学び合うことができるようにしている。その活動を通して、自己の考えや意見、学んだこと等を発信することができる生徒を育てている。そのためにも、教員間の協力的な指導體制や、指導方法の工夫改善を行っている。

なお、授業公開を適宜実施し、お互いの授業を見合う中で、生徒の違った一面を発見したり、自分自身とは異なる手法に出会ったりして、今後の授業実践での新たな取り組みに役立つものと考えている。

### 3 現3年生のこれまでの「命」の学習

生徒たちを取り巻く環境が豊かになり、日常生活を不自由なく送ることができている。一方、ネット環境が飛躍的に進歩する中で、人と人との関係が希薄になり、他者が経験した痛ましい出来事や事実について深く考えることは忘れられる傾向にある。それは、豊かな生活が当たり前になり、「命」について考える機会が少なくなっているからではないだろうか。しかし、世界のある地域で紛争による犠牲者がいることを知ると、平和の有り難さを実感したり、震災が起こっても精一杯生きている被災者がいることを知ると、自分も頑張ろうという前向きな気持ちをもてたりする。つまり、自分の立場を悲惨な状況に置き換えることで、生きていることの大切さに気付くことができる。また、命の大切さを学ぶ上で、「死」の反面である「生」についても目を向ける必要があると考える。

そこで、「防災学習」「平和学習」「命の誕生」をテーマとして、「生」と「死」の両面を考えさせ、生徒の命に対する意識の高揚を図るとともに、今を精一杯生きていこうとする生徒を育てたいと思い、活動に取り組んできた。

### 「命」の学習の3年間の指導計画

	防災学習	平和学習	命の誕生
1年	・陸前高田交流会	・校長講話による 特攻隊員の手紙朗読	・「自分史」作成
2年	・神戸市との交流 （名古屋のPR） ・東日本大震災の被災者による講演会 ・港防災センター、減災館 ・名古屋市消防航空隊	・愛知・名古屋 戦争に関する資料館 ・被爆ピアノとのセッション ・「核」を見抜く平和道徳 ・平和学習発表会	・家族からの手紙 （いのちのバトン） ・命T-シャツ作成 ・助産師による命の授業 ・「生」教育 ・保育実習体験
	・「防災学習」「平和学習」「命の誕生」をテーマとしたPV作成		
3年	・ひまわりプロジェクト ・「ほらね、」の合唱 ・渚中学校訪問	・被爆体験伝承講話 ・千羽鶴作成 ・原爆ドーム、平和記念公園 ・修学旅行における平和道徳 （いのち） ・夾竹桃物語 -わすれていてごめんね-	・家族への手紙（予定）
	・修学旅行報告会 ・広島平和記念式典		

## (1) 防災学習

予測不能な自然災害の中、極限状態に置かれても懸命に生きようとする人がいたことを学び、大切な命を守る術を考える。また、震災時の知識や備えを身に付け、自分の命を守ろうとする心を育む。

### ① 陸前高田交流会（1年生3学期）

平成24年以降、名古屋市と陸前高田市は、「絆協定」を締結し、両市の生徒の交流を続けている。陸前高田市の交流団が本校を訪れ、交流活動を行った中で、陸前高田市教育長の金賢治先生に、「東日本大震災から学ぶ防災学習」というテーマで講演していただき、震災時における自助・共助の大切さを学ぶことができた。また、震災当時に母親を亡くしてしまった5歳の女の子が、「生まれたくなかった」と泣きながら訴えたという事実を知り、生徒たちは大きな衝撃を受けた。そして、金先生に「生きよう君らしく」という言葉を贈っていただき、「震災を忘れないようにもっと勉強したり、伝えたりしたい。」「今の生活が恵まれていることが分かった。毎日を精一杯生きたいと思った。」などの感想を聞くことができた。金先生の講演をきっかけに、生徒たちが主体的になり、「震災について勉強したい!」「もっといろんな人の話を聞きたい!」という声があがるようになった。



資料1 金先生の講演



資料2 交流会で制作した  
スタンドグラス

### ② 神戸市立渚中学校との交流（2年生1学期～）

陸前高田交流会をきっかけに、生徒から「中学生にできる防災を学びたい」「他都市の中学校の防災学習を調べたい」という意見が出るようになった。そこで、1995年1月17日に阪神淡路大震災を体験した神戸市立渚中学校にコンタクトをとり、交流活動を行うことになった。渚中学校は震災復興住宅がたちならぶHAT神戸（Happy Active Town）に位置し、各地で行われるさまざまな震災関連行事への参加を通し、単に出来事を見つめ直すだけでなく、防災について深く考える活動をしている学校である。防災について学ばせてもらう前に、「まずは、自己紹介と名古屋のPRをしよう!」と話し合い、市内の観光地や名古屋めしが食べられる飲食店に分散し、PR動画を制作した。



資料3 市内分散の様子

### ③ 港防災センター・減災館訪問（2年生2学期）

防災について、「自分たちで調べたり、勉強したりしたい。」と日記に書いた生徒がいた。その生徒は市内に「港防災センター」や「減災館」があることを調べ、校外学習として訪問することを提案した。訪問した防災センターでは、震度7の揺れを実際に体験したり、地元の災害である伊勢湾台風の被害を学んだりすることができた。減災館では、直下型と海溝型の違いや液状化現象の恐ろしさ、ハザードマップの詳細など、震災についての知識を身に付けることができた。「震度7の揺れが強すぎて怖かった。何もできないと思った。」「揺れで家が倒れなくても、液状化現象に気を付ける必要がある。」などと感想を述べた。事後活動として、テーマ別に学んだことをまとめ、発表会を行った。



資料4 震度7を体験する様子



資料5 発表会準備の様子

### ④ 名古屋市消防航空隊訪問（西日本豪雨災害義援金募金 2年生2学期）

当時、西日本豪雨によって被災した広島県や岡山県の悲惨な状況が連日報道されていた。そのことを知った生徒たちが自主的に学校の周辺に立ち、募金活動を行った。また、報道で必死に救助活動を行う人の姿を見て、その職業について調べたところ、「消防航空隊」ということが分かった。そして、名古屋市消防航空隊を訪問し、話を聞かせてもらうことができた。航空隊員が活動する場所は常に危険であり、一刻を争う命懸けの仕事であることが分かった。話をしてくださっている最中、その隊員に出動命令が出され、緊急出動をしていった。航空隊員のリアルな姿に直面し、生徒たちは緊迫した様子から、「消防航空隊のように命懸けで仕事をしてくれる人がいるからこそ救われる命がある。」ということを知ることができた。



資料6 募金活動の様子



資料7 ヘリコプターに  
塔乗体験する生徒



資料8 緊急出動の様子を  
見つめる生徒

### ⑤ ひまわりプロジェクト（3年生1学期～）

交流をしている渚中学校から『はるかひまわり』の存在を教えてもらった。「はるかひまわり」とは、阪神大震災由来のひまわりの種を全国で生育し、災害や命の尊さを再考する機会とするという取り組みである。本校もその取り組みに参加す

ることになり、生徒会のスローガンを「ひまわりの約束」として、3つの約束を掲げた。1つ目は、個々がひまわりのように強く、大きくなること。2つ目は、集団としてひまわりのように全員で同じ方向（目標）を目指すこと。3つ目は、ひまわりが咲き誇るような「咲顔<sup>えがお</sup>」で生活することである。ひまわりを育てる過程で、命の大切さや人との関わりの大切さを実感することができた。



資料9 ひまわりプロジェクトの説明をする生徒会長

## (2) 平和学習

常に死と隣り合わせだった状況を知り、その過ちを繰り返してはならないことを学ぶ。戦時中の生活を学び、学んだことをまとめて、学習発表会を開くことで、戦争の悲惨さや平和の大切さをより実感する。

### ① 愛知・名古屋 戦争に関する資料館訪問（2年生1学期）

戦時中、戦死前提の体当たり攻撃を行った特攻隊員について、全校集会で校長講話を行った。その中で、何名かの隊員が家族に残した手記を紹介した。その講話をきっかけに、戦争に関する知識を深めたいという生徒の希望から、学区内にある「愛知・名古屋 戦争に関する資料館」を訪問した。そこで、「戦争の体験談を聞く会」として、戦争体験を聞くことができた。空襲時の防空壕の緊迫感や極度の食料不足、家族を失う絶望感など現代とはかけ離れた状況を学ぶことができた。当時の様子を語ってくださった体験者の方は、「今の生活は本当に恵まれている。このことを忘れないでほしい。」という言葉を何度も繰り返していた。生徒たちは今の生活のありがたさを実感することができた。



資料10 体験談を語る様子



資料11 体験談を聞く生徒たち

### ② 被爆ピアノとのセッション（2年生2学期）

1945年8月6日午前8時15分、原子爆弾は、広島の上空約600mで炸裂した。絵本『ヒロシマのピアノ』に描かれているように、いくつものピアノも被爆し、大きく損傷した。ピアノ調律師の矢川光則さんは被爆したピアノを修復し、戦争の悲惨さが風化しないように音色とともに被爆した当時の広島の悲惨な事実を各地に

届け続けている。そこで、本校の文化発表会のゲストとして招き、命を生み出し、そして育む偉大な大地をたたえる『大地讃頌』を被爆したピアノの音色に合わせて全校生徒で命T-シャツを着用し、合唱した。そして、尊い大切な命を未来へつなげようと会場に呼びかけた。



資料 12 調律師の矢川光則さん



資料 13 全校合唱の様子

### ③ 平和学習発表会（2年生2学期）

文化発表会での被爆ピアノとのセッション後に、「戦争に関してもっといろいろなことを具体的に調べたい」という意見が出てきた。そこで、生徒たちが、「名古屋の被害」、「原子爆弾」、「特別攻撃隊」、「戦後の復興」というテーマに分け、隣接する愛知県図書館を活用して、調べ学習を行った。また、自分たちも人に伝えることができるようになっていきたいという思いから、平和学習発表会を開くことになった。海外には「原爆投下は戦争を止めるために有効な手段だった。」という見方があることを知り、生徒たちは驚いた様子だった。生徒たちが一生懸命調べてきたことを語り掛けるように伝えようとする姿から、平和を願う気持ちの高まりが感じられた。



資料 14 愛知県図書館での調べ学習



資料 15 学習発表会の様子

### ④ 被爆体験伝承講話（千羽鶴作成 3年生1学期）

修学旅行の事前指導として、被爆体験伝承者を広島県から招き、戦争の悲惨さを講演していただいた。原子爆弾の残酷さが具体的なエピソードや写真から生徒たちに伝わり、「二度と繰り返してはいけない」ということが実感できた。また、平和記念公園の原爆の子の像のモデルである佐々木貞子さんが闘病生活の中で鶴を折ったことから「千羽鶴」が平和のシンボルとなっていることを聞いた。全校生徒で千羽鶴を作成



資料 16 被爆体験伝承講話

し、修学旅行で平和記念公園に奉納しようという取り組みにつながった。半分以上の生徒が鶴を折ることができなかったが、3年生が主体となって1、2年生に教えることで、全員が折れるようになった。そして、平和に対する意識の高揚へとつながった。



資料 17 千羽鶴作成の様子と完成した千羽鶴

### (3) 命の誕生

命の誕生に関する講演、体験を通して、多くの人の愛情に支えられているありがたさを知り、大切な命を後世につなぐ意識を高める。生まれることの神秘さを知ること、生きている喜びを実感させ、自尊感情を育み、過去から未来へとつながる命の大切さを学ぶ。

#### ① 「自分史」作成（1年生3学期）

現在の自分を客観的に理解するために、これまでの人生の振り返りをまとめた「自分史」を作成した。作成するにあたり、乳児期や幼児期の自分について家族にインタビューした。名前の由来や忘れられないエピソードなどを改めて知ること、自分自身が家族に支えられ、愛されて成長してきたことを実感することができた。

「自分にとって家族とは？」という問いに対して、「かけがえのない存在で、家族のためにも自分の人生を大切に生きたい。」と自分の思いを述べる生徒がいた。他にも、自分自身の存在意義を再認識し、前向きに生きていこうとする決意が感じられる記述が多く見られ、命の大切さを実感できた活動になった。

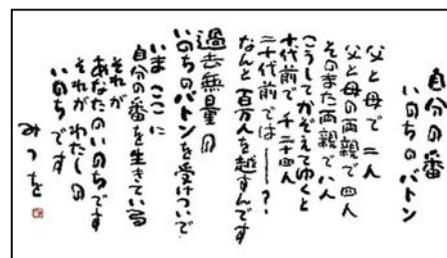


資料 18 生徒の幼少期の写真

#### ② 家族からの手紙（相田みつを「いのちのバトン」）（2年生1学期）

「自分史」を作成したことで、生徒は家族に対する感謝の気持ちや、家族からの期待に応えたいという気持ちもてるようになり始めた。そこで、親元を離れて2泊3日のキャンプをする稲武野外学習の際に、家族からの手紙をそれぞれの生徒にサプライズで渡した。多くの生徒が涙を流しながら手紙を読んでいたことが印象的

であった。「生まれてきてよかった」「これからもっと頑張ろうと思った」など前向きな言葉をたくさん聞くことができた。そして、相田みつをさんの詩「いのちのバトン」を紹介した。自分の命、自分の存在が奇跡であることや、後世にもバトンをつなげる使命があることを実感することができた。



資料19 いのちのバトン

### ③ 命T-シャツ作成（2年生2学期）

稲武野外学習後に、命の大切さを発信していきたいという思いから、「命T-シャツ」を作成することになった。デザインやメッセージを全校生徒から募集し、投票によって決めた。T-シャツのオレンジ色は、命の起源を象徴する太陽の色。胸のマークは、芽生えをイメージ。背中のメッセージは、未来への希望と使命を表現した。文化発表会や校外学習など様々な場面で着用し、命に対する生徒の意識の高揚を図るとともに、命の大切さを発信し続けた。



資料20 命T-シャツ

### ④ 助産師による命の授業・「生」教育（2年生2学期）

助産師を講師として招き、命の授業を行った。授業の始めに、一人一枚ずつ黒い小さな画用紙が配られた。その画用紙には針の穴が開けてあり、その小さな針穴が命の起源である受精卵のサイズであることを教わった。生徒たちから「こんなに小さいんだあー！」という声が多くあがった。一人一人の大切な命が誕生するまでの過程やその神秘さを知ることができ、妊婦体験をした生徒は、「想像以上に重かったし、一人で靴下を履くことすら困難で驚いた。」と感想を述べていた。また、胎児の成長過程における模型を抱っこしたり、疑似の産道を通る体験をしたりすることで、母親がどれほど大変な思いをして自分を出産してくれたのかを考えるきっかけとなった。



資料21 命の授業の様子



資料22 疑似の産道を通る生徒

最後に、ある女性がトイレで出産し、パニックを引き起こしてしまい、赤ちゃんを殺害してしまった事件があったことを知った。正しい知識と正しい環境で命のバトンをつないでいくことが大切だということが分かった。

## ⑤ 保育実習体験（2年生3学期）

生まれてきた命がどのような発達段階を経て成長していくのか、小さな子どもたちを育てるために、どのような思いや行動が必要なのかを学ぶために保育実習体験を行った。準備段階から自分たちに何ができるか考え、紙芝居を抑揚をつけて読む練習をしたり、色々な手遊びができるようにしたりしていた。その中で、園児に嫌な思いをさせないように、安全・衛生面に気を配ることも大切だと気付くことができた。実習当日には、園児がもつ大きなエネルギーに圧倒されながらも、園児や保育士と真摯に関わることができた。生徒の感想に「園児が元気いっぱい遊べるのは、保育士の安全管理とあたたかい思いのおかげということが分かった。」「想像以上の激務でめちゃくちゃ疲れた。保育士を尊敬します。」と記しており、小さな子が成長する上で、周りの支援が必要であることを実感することができた。

また、事前に行ったマナー講座や保育実習体験を通して、社会での人との接し方や言葉遣い、あいさつ等の礼儀作法を学ぶことによって、社会人として必要な道徳やマナーを身に付けることができた。



資料 23 保育実習体験の様子

### PV制作

「防災学習」、「平和学習」、「命の誕生」を3本柱として1年生の頃から学習に取り組んできた。その3本柱を振り返り、学習のまとめをするためにPVを作成することにした。学級のテーマソングであるWANIMAの「やってみよう」の歌詞を自分たちで考え、その歌詞に合うような映像を撮影した。

#### 生徒が制作したPVの歌詞

学習内容	歌 詞
防災学習	『生きよう君らしく』やりたいことが いっぱい待ってるから
	いろんな被害を 心に刻んで 命を大切に
平和学習	暗い過去にも 目を向けて 悲惨な時代を忘れるな
	今だから分かるありがたさ 恵まれた時代に
	つなげようこの思い 平和な世界が大好きなんだから
命の誕生	つらくなんかない 愛さえあれば
	小さな命は 大きなキセキ

学んだことをうまくまとめ、自分たちの真っすぐな気持ちを表現することができた。また、『このクラスに会えてよかった』と思えるクラスを目指そう」という歌詞もあり、クラスの一体感を高めることができた。

## II 令和元年度の実践

### 1 修学旅行のねらい

学びの集大成としての修学旅行のねらいを以下のように設定した。

- ・ 広島、神戸でしかできない体験を通して、社会的な視野を広げ、自己の生き方を考えることができるようにする。
- ・ 充実した修学旅行にするために、一人ひとりが責任をもって行動し、仲間と協力して活動する。
- ・ 「自らの手で作り上げた修学旅行」として、学級の絆をさらに深める。

### 2 行程

上記のねらいを踏まえ、以下のような行程で修学旅行を実施した。

令和元年6月4日(火)～6日(木) 2泊3日 目的地：広島、神戸

	6月4日(火)		6月5日(水)		6月6日(木)
8:00	名古屋駅集合	7:30	旅館発 ↓ 貸切バス	9:00	ホテル発 ↓ 徒歩
8:36	名古屋駅発 ↓ 新幹線	11:15	姫路城 ↓ 班別分散	9:30	USJ ↓ 徒歩
10:55	広島駅着 ↓ 広島電鉄	12:30	姫路駅発 ↓ 貸切バス	15:00	ホテル発 ↓ 貸切バス
11:35	原爆ドーム・ 平和記念資料館 ↓ 広島電鉄、フェリー	14:00	神戸市立渚中学校 ↓ 貸切バス	18:00	丸の内中学校着
15:00	宮島・厳島神社 ↓ フェリー、貸切バス	16:50	南京町 ↓ 徒歩		
18:45	お好み焼き体験 ↓ 貸切バス	17:40	震災メモリアルパーク ↓ 貸切バス		
20:00	旅館『魚光』	18:40	六甲ガーデンテラス ↓ 貸切バス		
		20:30	THE PARK FRONT HOTEL		

### 3 事前の取り組み

#### (1) スローガンの作成



学級全員で話し合い、2つの思いからスローガンが決定された。1つ目は、名古屋市立の中学校で初めて広島に行くこと。2つ目は、これまでに学んできたことを発信し、命があるからこそ楽しいことができるという思いである。

## (2) ルール作り

自分たちで修学旅行をつくり上げるために、ルールや服装・持ち物を検討していた。ルールに関しては、様々な意見が出た中で、2つのことを徹底しようということになった。1つ目は、オンとオフをはっきりさせること。学ぶところでは真剣に学び、楽しむところでは全員が笑顔になれるような雰囲気をつくるということである。2つ目は、人任せにしないことである。本学級の課題として、「誰かがやってくれる」という気持ちをもってしまうこと。人任せにせず、自ら積極的に行動することを約束した。2つのルールを意識しながら、必要な服装・持ち物を検討していくことができた。服装は華美でなく動きやすいことを基本として、2日目に渚中学校を訪問する際には、「ユニフォームみたいに揃えれば、一体感が出るんじゃない?」「じゃあ、いのていー(命T-シャツ)を持っていこうよ!」という意見が出され、命T-シャツで訪問することになった。また、これらのルール等に関して、修学旅行説明会で保護者が見守る中、生徒たちが自ら説明した。生き生きと説明する姿が見られ、保護者の方からも、「今から修学旅行が楽しみです」というお言葉をいただいた。



資料 24 説明会の様子

## (3) 班の編成

1年生の頃からクラス替えもなく、これまでずっと同じメンバーで過ごしてきた。友達との接し方に多少の得意・不得意はあるが、誰とでもうまくやれる学級である。「どうやって班を決める?」と問い掛けても、「何でもいいよ!」「くじにすればワクワク感があるよ!」という反応を示し、「いろんな子とグループを組めた方が楽しい」という意見が決め手となり、男女バランスを均等にしたいと班を決めることになった。また、本校の新たな取り組みとなる修学旅行後の報告会において、それぞれの班が何の報告をするかという役割分担をした。「平和」「宮島」「姫路」「渚」「神戸」「グルメ」の6つのテーマに分け、1班4名の6班編成が完成した。

## (4) 修学旅行における個々の役割

全員が主役となり、脇役となれるように、一人一人に役割と責任をもたせた。しおりを全員で作成するために、必要なページを話し合い、構成することができた。オリジナルのしおりを作成したいという思いから、日程や持ち物だけではなく、「広島弁」「宮島の鹿」について紹介したページも完成した。また、出発式や各目的地において、前に出て話をする場を全員に与えた。出発式等では、担当した生徒の思いが聞けたり、各目的地では、事前に調べた現地の知識や情報を知ったりすることができた。



資料 25 しおりの表紙絵

#### 4 修学旅行の実際の取り組み

##### (1) 原爆ドーム・平和記念公園

新幹線で広島駅に到着し、路面電車で原爆ドームへ向かった。原爆ドームを実際に見るのは初めてという生徒ばかりで、神妙な面持ちで見つめていた。次に、原爆の子の像の前に移動し、平和セレモニーを行った。セレモニーの司会を



資料 26 思いを語る生徒

担当した生徒は、「僕たち一人一人の思いや行動で世界を変えることができると思う。争いをなくしていき、平和に近づいていきたい。」と平和に対する思いや願いを語った。その後、全校生徒で作成した千羽鶴を奉納し、全員で黙とうを捧げた。



資料 27 千羽鶴を奉納する生徒

また、班別分散学習で活動した平和記念資料館では、被爆した当時の写真や手記を目の当たりにした。悲惨な時代に目を向けることで、平和のありがたさを痛感し、世界の平和を強く願うとともに、自分自身が強く生きていくことを決心することができた。

##### (2) 宮島・厳島神社

原爆ドームから路面電車、フェリーを乗り継いで、宮島へ向かった。海上から厳島神社の大鳥居が見え、「干潮だから近くまで行く！」と生徒たちは喜んでいて。宮島に着き、伝統文化会館で杓子作りを行った。もみじや鹿などの焼き印によってオリジナルの杓子を作り、記念として学級に1つ大杓子をいただいた。

厳島神社について事前に調べた生徒は、厳島神社にまつわる神話について語り、「厳島は神様が住む島です。」と紹介した。その後、班別分散で神社を参拝したり、宮島商店街を観光したりして、有意義な時間を過ごすことができた。名物の「もみじ饅頭」や「カキ」を食べたり、家族にお土産を買ったりする姿が見られた。



資料 28 杓子作りと厳島神社

##### (3) 旅館「魚光」(相田みつを「いのち」)

宮島口からバスに乗り、広島市内の「お好み共和国」へ行き、広島焼き作りを体験した。いただいたエプロンを着用し、全行程を自分の手で行った。生地をひっくり返すことに苦労しながら、おいしく食べることが



資料 29 広島焼き体験

できた。その後、旅館「魚光」へと向かった。到着後は浴衣に着替え、大広間に集合し、学級レクと反省会を行った。学級レクでは、担当の生徒が場を大いに盛り上げ、笑いが絶えない時間となった。修学旅行中に誕生日を迎える生徒がいたので、「Happy Birthday」を歌い、ケーキ代わりに全員でアイスクリームを食べた。また、反省会として1日の振り返りをする中で、相田みつをさんの詩「いのち」を紹介した。平和記念資料館を訪問した際の感想を生徒に聞きながら、自分の命だけでなく、「すべての他人の命」が大切であることを実感させることができた。被爆した当時の悲惨な状況を学んだからこそ、生きていることの大切さに気付くことができた。



資料 30 学級レクと反省会の様子

#### (4) 姫路城

朝早くの出発にも関わらず、バス内はレクで盛り上がった。姫路城に着き、姫路について事前に調べた生徒は、姫路城の歴史や井戸に現れる「お菊」の亡霊が皿を数えるという伝説について説明した。また、おでんや明石焼きなどの姫路市のおすすめグルメを、「班別分散でぜひ食べてみてください!」と紹介した。時間の都合上、姫路城の天守閣に登ることはできなかったが、班別分散では、姫路城内を散策したり、明石焼きを食べたりと充実した時間を過ごすことができた。



資料 31 姫路で活動する様子

#### (5) 神戸市立渚中学校

交流活動を続けている神戸市立渚中学校を訪問した。防災学習に力を入れている渚中学校では、どのような取り組みをしているのかを学ぶために交流会を開くことになった。

##### 【交流会プログラム】

渚中学校 3年生 160名 @体育館

- |               |                    |
|---------------|--------------------|
| ① 渚中学校長のお話    | ② 渚中学校の学校紹介        |
| ③ 丸の内中学校の学校紹介 | ④ 阪神淡路大震災から学ぶ命の大切さ |
| ⑤ 丸の内中学校長のお話  | ⑥ 防災 J r. との交流会    |



体育館に入場する際には、学級のテーマソングである「やってみよう」を流していただき、あたたかい雰囲気の中で歓迎してもらった。渚中学校長も事前にやりとりしていたビデオレターや当日の本校生徒の姿を見て、「集団としての一体感」を褒めてくださった。渚中学校の学校紹介では、阪神淡路大震災後に全校生徒 25 名から始まったことや多くの復興住宅が建ち並ぶ街だからこそ、防災学習に力を入れているという説明があった。また、阪神淡路大震災後に復興を願い、作られた楽曲である「しあわせ運べるように」の合唱を披露してくれた。本校の学校紹介では、修学旅行に向けて、1年生の頃から取り組んできた「命」の学習や名古屋市や本校の文化を伝えた。そして、陸前高田交流会の際に金先生に教えていただいた復興ソングの「ほらね、」とLEDを活用したトワリングを披露した。



**資料 32 両校の学校紹介の様子と披露したトワリング**

次に、加藤りつこさんを講師として招き、「阪神淡路大震災から学ぶ命の大切さ」というテーマで講演していただいた。加藤さんが長男の安否を確認しにいった際に、救助隊に「お気を落とさないように」と言われた瞬間に長男の死を悟り、崩れ落ちたという経験を、涙を流しながら語られたことが、特に生徒たちの印象に残っている。ご自身の経験から、自分の人生を一生懸命に生きることや人と人との出会いがもつ意味について話していただいた。その後、本校校長から、「震災は乗り越えることができない。大きな傷を一生背負って生きていく。だからこそ、震災を経験した人は強い」という話があった。生徒は「命」について深く考え、自分自身の今後の人生をどのようにしていくべきかを見つめ直すきっかけになった。



**資料 33 講演会の様子**

最後に、渚中学校の防災 J r.との交流会を開いた。防災 J r.の活動報告や防災に対する意識、中学生にできる取り組みについて話を聞くことができた。また、互いの学校の取り組みについて、意見交換会が行われ、和気あいあいとした雰囲気の中、学ぶべきことがたくさん詰まった時間となった。本校の生徒にとって、大きな刺激を受ける貴重な経験となった。



**資料 34 防災 J r.との交流会**

## (6) 南京町・震災メモリアルパーク（神戸港）

渚中のみなさんが作った花道で、見送ってもらい、南京町へと向かった。班別分散での活動となり、中華料理やスイーツを食べ歩く姿が見られた。短時間の活動ではあったが、「この肉まんは絶対に食べる!」「もし並んでいたらやめよう」などと事前の行動計画を生かして、十



資料 35 南京町での活動

分に満喫することができた。次に、南京町から震災メモリアルパークへ歩いて向かった。道中では、「メリケンパーク」と名付けられた由来や震災時に被害にあった建物について説明を聞いた。震災メモリアルパークには、震災で崩れた波戸場が当時のまま保存されていたり、震災が起こった5時46分を示す石碑があったりして、



資料 36 神戸港での集合写真

震災を風化させてはいけないことを学んだ。また、神戸港には「BE KOBE」のモニュメントがあり、事前に調べた生徒は、「BE KOBEには、神戸の魅力は人であるという思いが込められている」と説明した。震災を経験した都市だからこそ、人のために力を尽くす大切さを発信していることが分かった。

## (7) 六甲ガーデンテラス

神戸港からバスに乗り、六甲山上にあるレストランへ向かった。修学旅行2日目は早朝からの活動であったが、疲れた様子も見せずに、バス内では歌を歌ったり、山の中の動物を探したりして盛り上がっていた。標高890mのレストランに着くと、店内から見える壮大な景色に「おーっ!」と声を上げていた。洋食ディナーを楽しんでいるうちに日が沈みだし、夕食を終えた班から展望台に行き、夜景観賞をした。展望台からは神戸港や大阪市内などが一望でき、「さっきまであそこにいた!」「あれってUSJじゃない!？」などと興奮した様子であった。



資料 37 六甲ガーデンテラスでの様子

## (8) THE PARK FRONT HOTEL

翌日に入場予定のUSJに一番近いホテルと聞いただけで、生徒たちのテンションは上がっていた。ホテル内の設備はとてもきれいで、フロントにUSJの有名な地球儀のモニュメントがあったり、エレベーターにはタイムマシンに乗ったような演出があったりして、生徒



たちはうれしそうな様子だった。ただ、さすがに疲れていたのか、事後の生徒の感想に、「めちゃくちゃきれいでテンションが上がった！でも、すぐに寝てしまったので、もったいなかった気がする」と書かれていた。また、翌朝のビュッフェでも、大阪名物のたこ焼きやUS Jのキャラクターが描かれたオムレツなど魅力的な食べ物が多く並んでいた。何度もおかわりを取りに行き、普段よりたくさん朝食をとる姿が見られた。



資料 38 ホテルでの様子

### (9) ユニバーサルスタジオジャパン

園内では班行動になるが、US Jの班編成をする際に、「絶叫系が好きな人と苦手な人とは別の班にした方がよい」という意見が出た。それぞれの班が楽しめるように男女バランス等にも全員で配慮し、班を編成することができた。生徒たちは入園時間が待ちきれない様子であったが、入園すると急いでアトラクションに向かったり、ショーを見に行ったりと活発に活動できた。修学旅行の思い出に残るように、班のメンバーでおそろいの仮装をしたり、アトラクションの待ち時間に班のメンバーで簡単なゲームをしたりするなど存分に楽しむことができた。また、園内ではぐれてしまったり、体調不良になってしまったりすることなく、集合時間に全員が集まることができた。

修学旅行1日目の新幹線に乗車するところから、3日目のUS Jに入園するところまでの活動の様子をビデオカメラに収めていた。その映像を編集した動画の鑑賞会を帰りのバス内で行った。1日目の平和記念資料館で真剣な表情で展示物を見る姿や2日目の旅館で行った学級レクで大笑いする姿が見られ、充実した3日間であったことを実感することができた。生徒に修学旅行の感想を聞くと、「1日が1秒に感じるほどあっという間に時間が過ぎた」と述べた。生徒の表情から達成感が伝わり、学びの集大成として、最高の修学旅行にすることができたと言える。



資料 39 US Jでの様子

## 5 事後の取り組み

### (1) 修学旅行の振り返り

修学旅行の振り返りとして、以下のアンケートに回答した。

【修学旅行アンケート】	----- ----- ----- -----			
	よくできた	できた	あまりできなかった	できなかった
1. 原爆ドーム・平和記念公園では、平和について考えることができましたか？				
2. 渚中学校との交流会では、防災について何かを得ることができましたか？				
3. USJでは仲間とともに楽しむことができましたか？				
4. 司会や説明などの自分の役割を果たすことができましたか？				
5. 平和や防災について学び、命の大切さを感じることができましたか？				
6. 修学旅行に「また行きたいな」と思うことができましたか？				

これらの6項目のアンケートに対して、全ての生徒が「よくできた・できた」と回答した。また、修学旅行の感想として、次のように記述した。

平和記念公園の資料館では、見ただけで心が苦しくなってしまう、もう二度とあってはならないことだと思いました。また、私と同じ年の人達がひどい目にあい、自分の将来の夢などを叶えられずに亡くなってしまったという事実を改めて知ることができた。私たちが生きている今に改めて感謝しました。

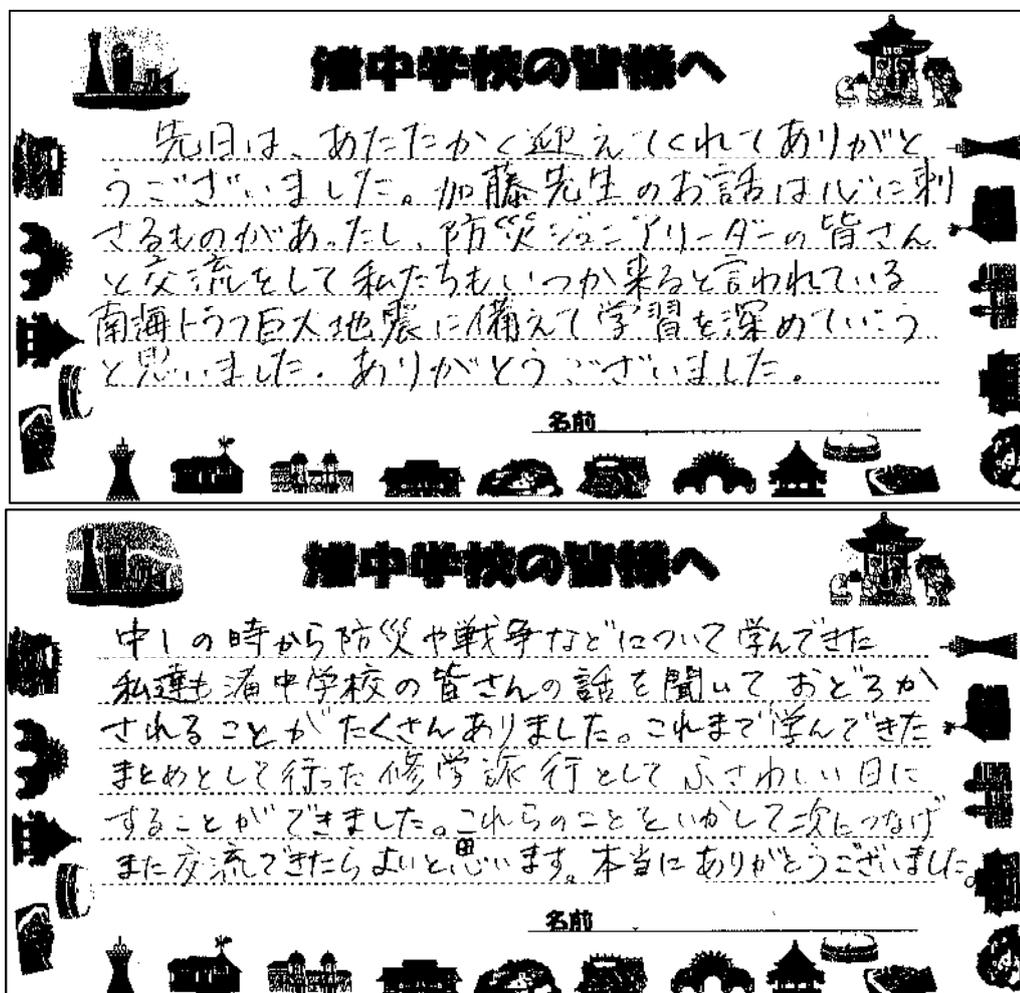
平和学習では自らが平和を担当し、千羽鶴を中心として作ったことでより原爆の恐ろしさを感じることができました。また、原爆ドームからは建物の力強さ、キョウキクドウからは植物の生命力を感じました。私も命を大切にしたいです。  
メモリアルパークでは、震災の被害を目で見ることができ、私たちが南海トラフに備えるべきだと感じました。

加藤さんの話を聞いて、一瞬？大切な命が失われたことについての悲しみが痛いくらい伝わってきた。また原爆ドームや平和記念公園とおとすれて今の広島からは考えられないような悲惨な過去を学んだ。この時代に生まれた私達だからこそ、こんな平和な生活を送れりありがたさを感じた。たくさん犠牲を払って手に入れた平和はこの先も大切にしたいと思った。

#### 資料 40 生徒が記述した感想

「広島や神戸でしかできない体験を通して、社会的な視野を広げ、自己の生き方を考えることができるようにする」というねらいを達成できたと言える。そして、一人一人に司会や説明などの役割を与えたことや、1年生の頃から修学旅行に向けて学んできた積み重ねが、「自らの手で作り上げた修学旅行」として大きな成果を上げ、学級の絆をさらに深めることにつながった。

修学旅行中に訪問した渚中学校にお礼のメッセージを送りたいという意見が出てきた。そこで、それぞれが学んだことや感じたことを踏まえて、手紙を送った。また、渚中学校から返信が届き、生徒たちがうれしそうな表情で返信の手紙を読む姿から、今後も交流を続けていきたいという気持ちが伝わってきた。



資料 41 渚中学校に送った手紙

## (2) 修学旅行報告会

名古屋市立の中学校で初めて広島に行ったことや、1、2年生に千羽鶴の作成を手伝ってもらったこともあり、本校では新たな取り組みとなる修学旅行報告会を開いた。修学旅行班で分担した、「平和」「宮島」「姫路」「渚」「神戸」「グルメ」の6つのテーマで報告を行った。それぞれの班の発表内容や、原稿を見ずに堂々と発表する姿を見て、1年生の生徒は、「自分たちもいつか先輩たちのような報告会を開けるように、一生懸命勉強していきたい」と感想を述べた。また、報告会の司会者が、「私たちの発表をきっかけに、今の生活にある『平和』とは何かを考えてみてほしい」と訴えかけた



資料 42 報告会の様子

ことから、「原爆ドームや平和記念資料館に行って、平和について学びたい」と平和について考えようとしてくれた1、2年生がたくさんいた。これは、報告会を開き、修学旅行の中で学んだことを発信したことの成果だと考える。

最後に、司会者が、「旅館で浴衣を着て行った学級レクや渚中学校で披露した合唱などを通して、クラスの一体感が生まれた」と感想を述べた。残りの中学校生活も自分たちらしく、オンとオフをはっきりさせて楽しく過ごしていきたいという決意が伝わってきた。



資料 43 司会者が話す様子

### (3) 広島平和記念式典（夾竹桃物語－わすれていてごめんね－）

修学旅行後に、緒方俊平著「夾竹桃物語－わすれていてごめんね－」を読む機会をつくり、原爆投下時に自らを投げ打って夾竹桃を守った犬の姿や、夾竹桃が少年にその物語を伝えることから、周りを思いやる心の大切さや平和の尊さを知ることができた。そして、夾竹桃物語におけるコンクールに応募することになり、「感想絵画」

「感想文」「書道」の3つのカテゴリーから1つ選び、3年生全員が応募した。その結果、本校生徒の感想絵画が入選し、8月6日に行われた「広島平和記念式典」に招待された。生徒の入選を学級で伝えた際には、全員が自分のことのように喜んだ。

広島平和記念式典当日、早朝から平和記念公園には広島市民だけでなく、世界中から何万人もの人々が集まっていた。式典の演説では、戦争を二度と繰り返してはいけないことや、世界中の平和を願うことが伝わってくる言葉が多く使われていた。そ



資料 44 入選した感想絵画

の中でも、広島市の代表児童（6年生）が、「悲惨な過去を悲惨な過去のまま終わらせないために、世界中の人たちに伝えていきたい」と訴えかけたことが印象に残り、本校の生徒にも修学旅行に向けて学んできたことを、継続して発信させていく必要があると感じた。8月6日は、戦争や原子爆弾の悲惨さを風化させてはいけない大切な日であることを本校の代表生徒は実感することができた。



資料 45 広島平和記念式典の様子

### Ⅲ おわりに

1年生の頃から、「防災学習」「平和学習」「命の誕生」を3つの柱として命の学習に取り組んできた。

「防災学習」では、陸前高田交流会をきっかけに、神戸市立渚中学校ともつながり、防災の取り組みを学んだ。防災に対する意識が高まり、港防災センターや減災館に行き、震災に関わる様々な知識を身に付けることができた。近い将来に発生すると想定される「南海トラフ巨大地震」等に備えて、自他の「命」を守る大切さを実感することができた。



資料 46 渚中学校での記念写真

「平和学習」では、資料館を訪問したり、講演を聞いたりする中で、生きてくても生きることができなかつたという悲惨な過去を知り、二度と過ちを繰り返してはいけないことを実感することができた。この感覚が、現在や未来の平和を願う気持ちにつながっており、「命」の尊さを理解し、今を精一杯生きていこうとする姿に表れている。

「命の誕生」では、講演や体験を通して、多くの人の愛情に支えられているありがたさを知ることができた。特に保育実習体験では、自分自身の幼少期と重ね合わせることで、自尊感情を育み、生きている喜びを実感し、過去から未来へとつながる「命」の大切さを学ぶことができた。

これらの3つの柱のように、「生」と「死」の両面を考えさせ、生徒の「命」に対する意識の高揚を図る活動に取り組んできた。その上で、学びの集大成として、修学旅行を行った。原爆ドームや平和記念資料館の見学を通して、戦争の悲惨さを改めて実感し、平和を願う気持ちがより強くなった。渚中学校を訪問し、「阪神淡路大震災から学ぶ命の大切さ」というテーマで講演を聞いたり、防災Jr. と交流会を開いたりしたことで、震災を他人事ではなく、自分の事として捉え、命を守ろうとする意識が高まった。

命の大切さを体感する上で、とても価値のある修学旅行となった。その価値を高めたのは、1年生の頃から命の学習に取り組んできたことだと考える。学級全員が学校生活や修学旅行を充実させようとして、命の学習を創り上げてきた。その成果として、自分たちの手で作り上げた修学旅行という感覚をもつことができた。命の学習と修学旅行の事前学習を密接に関連付けたことで、命の大切さを理解し、自分自身の人生をどのように生きるべきかをしっかりと考えることができた。今後は、修学旅行で学んだことを生きる活力として、進路選択や人生設計に活かせるようにしていきたい。そして、一人一人に与えられた「奇跡の命」を未来へとつなげていけるように指導していきたい。



資料 47 平和を願う生徒たち